

『山の観天望気～雲が教えてくれる山の天気～』（猪熊隆之 海保芽生著）

現在は、欲しい情報が欲しい時に欲しい答えの形で直ちに手に入るという便利な世の中であり、これは登山の世界でも同様であろう。

目的の山の登山道や山小屋の直近の状態などは勿論のこと、例えば、クライマー諸氏のウェブサイトを開けば、甲斐駒・赤石沢ダイヤモンドA フランケ赤蜘蛛ルートのたった昨日の登攀記録が早やサイトアップされていて、恐竜カンテの7ピッチ目のボルトは信頼できないので新しいボルトを打ち直しておいたなどという超直近情報も掲載されている始末である。

山の天気予報も同様で、山中でスマホを開けば痒い所に手が届く天気予報がピタッと出てくる仕組みになっている。これはこれで大変便利なモノではあるが、山のHPなどを見て他人がつい先日歩いた山の紅葉情報に惹かれて行先を選び、ルートもタイムもその先蹤者の山行記録を丸飲みにし、山行期日も山の天気予報のピンポイントご宣託に従がって決めるという塩梅となると、これはもう“カタログ登山”の最たるモノで、世の中に溢れている山岳情報にコントロールされた“登山ロボット”の域を出ないものとなる。コレ、デジタル社会がもたらす弊害の最たるモノの一つでもあろう。

マ、登山期日・行程の決定などは何日も先の天気予報を参照しなければ決められないことも多いが、山中に入ってから天気予想のネタが溢れている現地に身を置いている訳だから、何も現地から遠く離れた気象予報会社の天気予報を見るまでもなく、所謂「観天望気」という古来から人間が親しんできた天気判断法を活用する方が現実的というものではなかろうか。

溪流に棲む岩魚は洪水を引き起こす大雨を予測して、大雨が降る前には河床の小石を腹一杯に詰め込んで洪水に流されないように岩陰に身を隠すというし、某大学の地震研究所の地震予測装置は水槽で飼われている鯰であるそうな。我々人類も太古にはこのような動物としての鋭い感覚を持っていたのであろうから、五感を磨けば多少は「観天望気」による天気判断ができるようになるのではないかな。観天望気は天の雲を観、風を聴き、大気の状態を望むことであるから、「オーイ、雲よ」と呼びかけながら雲の刻々の変化を眺めてその奥にある天候の推移を推測するのもこれまた楽しいことでもあろうし、登山中の悪天を避け得るという実利面も大きい。

さて、前置きが長くなったが、本書は山の天気予報提供で売り出した「ヤマテン」の猪熊社長とその社員が書いた本である。中身は主に雲の変化から天気の推移を予想する方法を述べたもので、雲発生の気象メカニズムなどの理論面も素人にも分かりやすく解説されているので、ナルホドと頷ける。

150 頁ほどの新書版の小冊子であるので、寝転がって読む内に大雨や大風を引き起こして山岳気象遭難の原因となる雲と、雲は出ているがさほど暴れない雲との区別や、この雲が出ると後何時間程度で風雨となるなどの知識が自然に身に付くように書かれている。雲の写真が豊富でこれを眺めているだけでも楽しいし、日頃は滅多に見られないような種類の雲の写真も掲載されている。

山岳気象は平地とは異なり、それぞれの山の地域特性、地形特性などに左右されるので同じ気圧配置下でもそれぞれの山で大きく異なっている。例えば、同じ八ヶ岳連峰にしても北八ヶ岳と南八ヶ岳では同じ日の天候が異なっている場合が多い。

そのような意味から、同じ観天望気でも山域別のやり方を詳述した本書続編の発行を期待したい。

ヤマケイ新書 2021 年 1 月 5 日刊、1000 円

(2020.12.01 記)

